

4. 障害不稔発生年次における適収穫時期

福島県農業試験場冷害試験地・平成11年度春夏作試験成績概要

1 部門名 水稻－水稻－収穫・乾燥・調製 01－01－24000000

2 担当者 小森秀雄 大谷裕行

3 要 旨

幼穂形成始期から減数分裂期まで、冷水掛け流しを行うことで、障害不稔発生年次における収穫時期と積算気温との関係を明らかにした。

(1) 掛け流し区の掛け流し期間の水温は、平均で17.7～18.6℃であった。この水温で行った結果、3カ年平均で稔実歩合は約50%であり、稔実粒数は約2万粒であった。慣行区は、3.7～4.2万粒であった。

(2) 帯緑籾を積算気温別に調査すると、帯緑籾稔実粒比率は、掛け流し区では、900℃より10%程度に低下し、慣行区では1000℃以上で20%以下となった。

(3) 開穎籾は、掛け流し区では各積算気温とも15%前後で一定であったが、慣行区はゆるやかに開穎粒率は上昇し、1050℃からは5%以上となった。

(4) 玄米の品質調査では、活青および青未熟粒は、掛け流し区では900℃から10%以下となり、慣行区では950℃で20%以下となった。

(5) 着色・茶さび粒は、掛け流し区では積算気温900℃以上で増加した。慣行区では900℃からは、1.2～4.5%の範囲であった。

(6) 以上から、障害不稔発生により稔実歩合50%前後となり、稔実粒数2万粒/㎡の程度の場合、積算気温900℃前後で帯緑籾が10%程度に減少する。900℃を超えると、着色・茶さび粒が急増するため、900℃を刈取りの目安とする。